

2019年2月7日

株式会社 リクルートマーケティングパートナーズ

高校教育改革に関する調査2018

「アクティブラーニング型授業」編

9割以上の高校が『アクティブラーニング型授業』を導入 「学校全体で導入している」高校が、2014年の3倍以上に増加 約半数の高校が「生徒の学びに向かう姿勢・意欲が向上した」と回答

株式会社リクルートマーケティングパートナーズ（本社：東京都品川区 代表取締役社長 山口 文洋）が運営する、リクルート進学総研（所長：小林 浩）は、高校の教育改革に関する現状を明らかにするため、全国の全日制高校に対して、高大接続改革、新しい学習指導要領、キャリア教育、進路指導、学校改革に関する取り組みに対しての調査を実施いたしました。このたび調査結果がまとまりましたので、一部をご報告いたします。本調査によるリリースは「アクティブラーニング型授業」編、「高大接続改革」編、「専門職大学」編の計3つあり、本リリースは「アクティブラーニング型授業」編です。

※本調査は、『キャリアガイダンス』編集部とリクルート進学総研が隔年で実施している調査で今回で第20回目。これまでは「高校の進路指導・キャリア教育に関する調査」の名称で、高校現場の実態を把握する調査として実施。第20回目の今回は「高校教育改革」の視点から高校現場の実態を把握することを目的としました。

「アクティブラーニング型授業」の 導入状況

■ 90.4%の高校が「アクティブラーニング型授業」を導入

- ・2014年47.1%→2016年92.9%→2018年90.4%
- ・2016年以降の導入率は9割以上をキープ

■ 「学校全体で導入している高校」が、2014年の3倍以上に増加

- ・2014年8.7%→2018年29.3%

■ 「教員個人単位での取り組み」は、前回より10.4ポイント減少

- ・2016年51.1%→2018年40.7%

「アクティブラーニング型授業」の 取り組みによる変化

■ 変化のトップは「学びに向かう姿勢・意欲が向上した（49.1%）」

- 1位：学びに向かう姿勢・意欲が向上した（49.1%）
- 2位：教員の授業観が変わった（41.5%）
- 3位：主体性・多様性・協働性が向上した（37.9%）

「アクティブラーニング型授業」の 課題や改善点

■ 半数以上の教員が「教員の指導スキルの向上（58.6%）」と「教材開発や授業準備の時間確保（54.9%）」が課題と回答

- 1位：教員の指導スキルの向上（58.6%）
- 2位：教材開発や授業準備の時間確保（54.9%）
- 3位：評価手法の確立（46.6%）

※出版・印刷物へデータを転載する際には、“「高校教育改革に関する調査2018」リクルート進学総研調べ”と明記いただけますようお願い申し上げます。

【本件に関するお問い合わせ先】
株式会社リクルートマーケティングパートナーズ広報担当
https://www.recruit-mp.co.jp/support/press_inquiry/

【調査概要】

- 調査目的：全国の全日制高校で行われている教育改革（高大接続改革、新しい学習指導要綱、キャリア教育、進路指導、学校改革に関する取り組みなど）の実態を明らかにする
- 調査期間：2018年10月5日（金）～2018年10月27日（土）投函締切
※10月31日（水）到着分までを集計対象とした
- 調査方法：郵送調査。校長宛に調査票を送付
- 調査対象：全国の全日制高校4703校
- 集計対象数：1203件（回収率25.6%）

【回答校プロフィール】

■設置者種別【時系列】（全体／単一回答）

(%)

	国公立	私立	無回答
2018年 全体 (n=1203)	72.6	25.9	1.5
2016年 全体 (n=1105)	71.0	28.0	1.1
2014年 全体 (n=1140)	73.3	25.9	0.8

■高校所在地【時系列】（全体／単一回答）

(%)

	北海道	東北	関東・甲信越	北関東	南関東	甲信越	東海・北陸	東海	北陸	関西	中国・四国	中国	四国	九州・沖縄	無回答
2018年 全体 (n=1203)	8.3	8.6	31.4	7.1	18.5	5.8	15.2	12.4	2.8	11.7	11.7	7.3	4.4	11.5	1.5
2016年 全体 (n=1105)	6.2	9.2	32.3	7.9	18.4	6.1	16.1	13.4	2.7	13.3	10.0	7.1	2.9	11.8	1.1
2014年 全体 (n=1140)	7.1	11.4	28.6	6.4	16.8	5.4	16.2	13.5	2.7	12.0	11.3	7.1	4.2	12.5	0.8

■高校学科(高校タイプ)【時系列】（全体／単一回答）

(%)

	普通科		総合学科		専門高校	その他	無回答	普通科	総合学科
	普通科単独校	普通科中心で学科併設校	総合学科単独校(移行中含む)	総合学科併設校					
2018年 全体 (n=1203)	56.8	20.9	5.5	1.1	13.7	*	2.0	77.7	6.6
2016年 全体 (n=1105)	56.6	20.2	6.2	1.2	11.5	3.4	0.9	76.7	7.4
2014年 全体 (n=1140)	54.6	20.1	5.2	1.1	11.8	5.4	1.8	74.7	6.3

※「その他」：2018年調査で選択肢を削除

■大学短大進学率【時系列】（全体／単一回答）

(%)

	70%以上	40～70%未満	40%未満	無回答
2018年 全体 (n=1203)	45.0	19.1	34.3	1.6
2016年 全体 (n=1105)	47.5	19.0	32.4	1.1
2014年 全体 (n=1140)	46.5	18.6	34.1	0.8

■校務分掌【時系列】（全体／複数回答）

(%)

	校長	副校長	教頭	教頭（副校長）	進路指導主事	進路指導部	教務主任	教務部	学年主任	学年担当	その他	無回答
2018年 全体 (n=1203)	5.9	2.6	13.0	*	59.4	10.6	9.6	1.1	1.2	2.5	2.1	2.0
2016年 全体 (n=1105)	0.1	*	*	0.1	85.0	13.1	*	*	2.4	9.4	1.4	1.4
2014年 全体 (n=1140)	—	*	*	0.5	85.0	12.5	*	*	1.9	7.0	2.3	1.8

※2016年までは進路指導主事に調査票を送付、2018年は学校長に調査票を送付

※「副校長」「教頭」：2014年・2016年調査の選択肢は「教頭(副校長)」

「アクティブラーニング型授業」の導入状況

■ 90.4%の高校が「アクティブラーニング型授業」を導入

- ・ 2014年47.1%→2016年92.9%→2018年90.4%
- ・ 2016年以降の導入率は9割以上をキープ

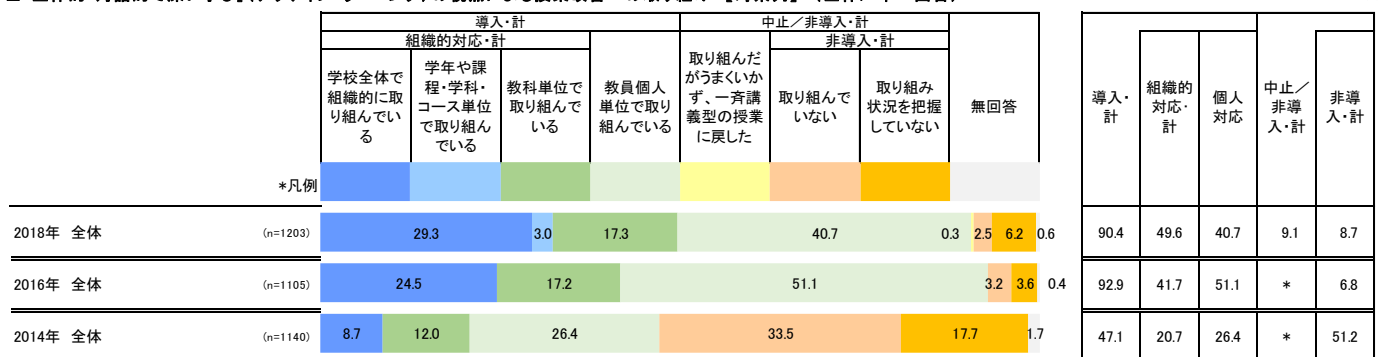
■ 「学校全体で導入している高校」が、2014年の3倍以上に増加

- ・ 2014年8.7%→2018年29.3%

■ 「教員個人単位での取り組み」は、前回より10.4ポイント減少

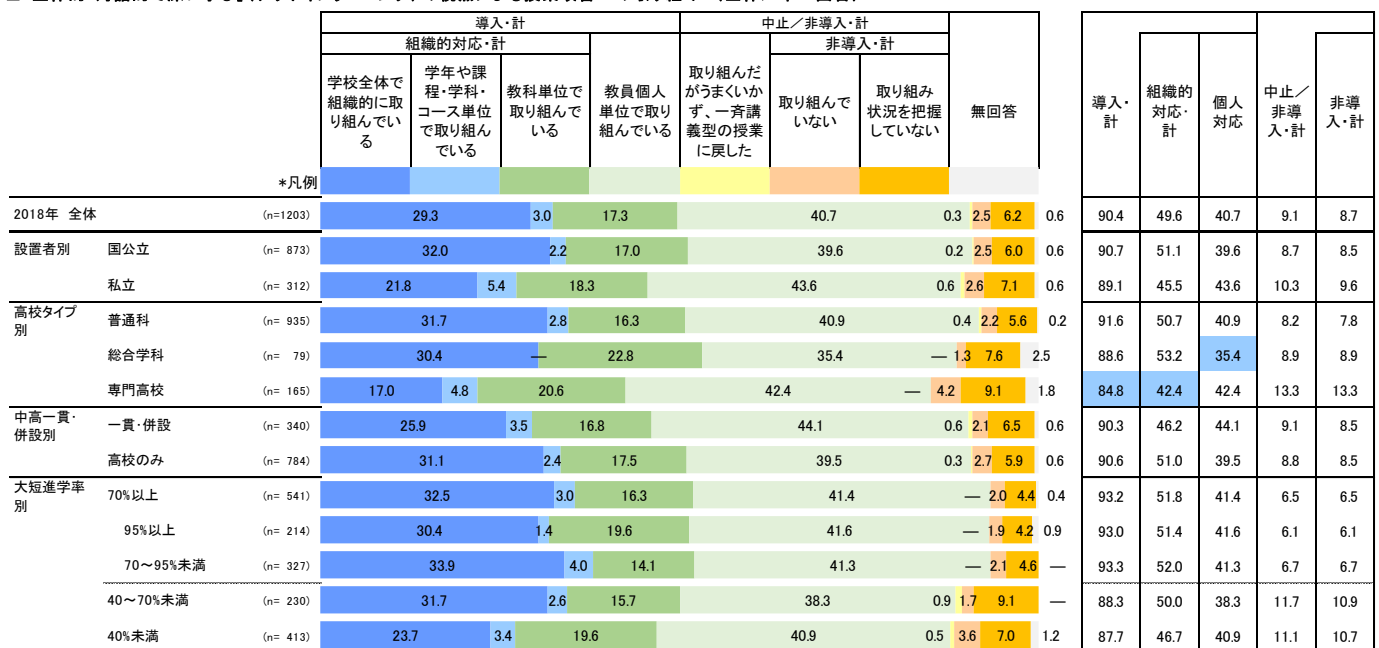
- ・ 2016年51.1%→2018年40.7%

■「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)の視点による授業改善への取り組み【時系列】(全体/単一回答)



※2018年は選択肢を追加・文言を変更:2016年までは「学校全体で取り組んでいる」「学校全体での取り組みではなく、教科で取り組んでいる」「学校や教科など組織的な取り組みではなく、教員個人で取り組んでいる」「取り組んでいない」「取り組み状況を把握できていない」5択で質問

■「主体的・対話的で深い学び」(アクティブラーニング)の視点による授業改善への取り組み (全体/単一回答)



※付表: +10.0 「2018年 全体」より10ポイント以上高い数値 +5.0 「2018年 全体」より5ポイント以上高い数値
-10.0 「2018年 全体」より10ポイント以上低い数値 -5.0 「2018年 全体」より5ポイント以上低い数値

参考: 「アクティブ・ラーニング」の定義 (文部科学省)

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。

発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

→本調査では「主体的・対話的で深い学び (アクティブ・ラーニング) の視点による授業改善に取り組んでいますか。」と尋ねた。

「アクティブラーニング型授業」の取り組みによる変化

■生徒の変化のトップは

「学びに向かう姿勢・意欲が向上した（49.1%）」

■教員の変化のトップは

「教員の授業観が変わった（41.5%）」

【生徒の変化】

- 1位（全体1位）：学びに向かう姿勢・意欲が向上した（49.1%）
- 2位（全体3位）：主体性・多様性・協働性が向上した（37.9%）
- 3位（全体5位）：思考力・判断力・表現力が向上した（17.8%）

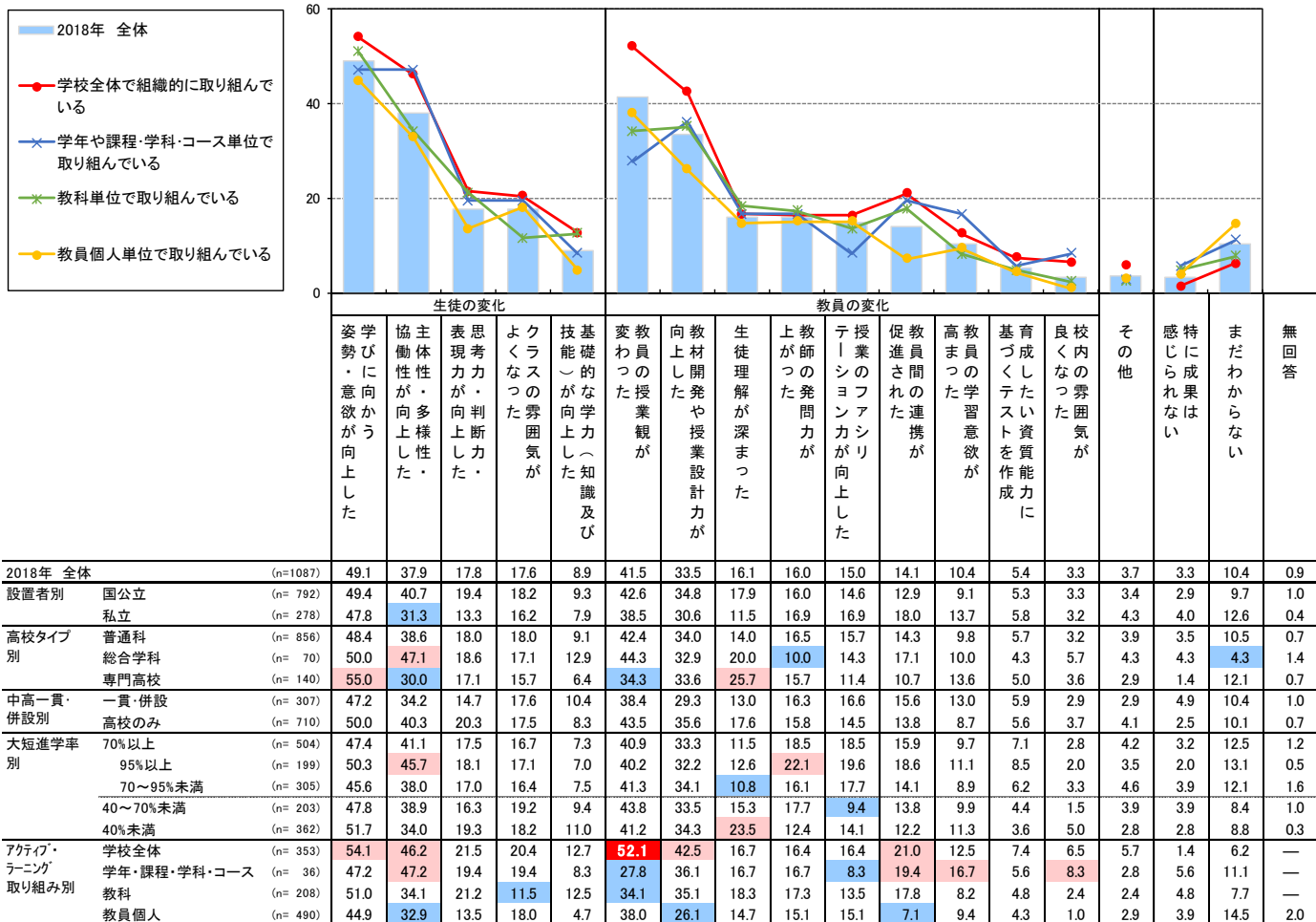
【教員の変化】

- 1位（全体2位）：教員の授業観が変わった（41.5%）
- 2位（全体4位）：教材開発や授業設計力が向上した（33.5%）
- 3位（全体7位）：生徒理解が深まった（16.1%）

・ <アクティブ・ラーニングの取り組み別> でみると

「学校全体で取り組んでいる学校」と回答した半数以上の高校が、『生徒の学びに向かう姿勢・意欲が向上した』と『教員の授業観が変わった』を回答しており、『教員の授業観が変わった』においては、全体より10.6ポイント高かった。

■授業改善に取り組んだことによる変化（「アクティブラーニング型授業」導入校のみ／複数回答）



※ +10.0 「2018年 全体」より10ポイント以上高い数値 +5.0 「2018年 全体」より5ポイント以上高い数値 ※カテゴリーごと「2018年 全体」降順ソート

-10.0 「2018年 全体」より10ポイント以上低い数値 -5.0 「2018年 全体」より5ポイント以上低い数値

■ 半数以上の教員が「教員の指導スキルの向上（58.6%）」と「教材開発や授業準備の時間確保（54.9%）」が課題と回答

- 1位：教員の指導スキルの向上（58.6%）
- 2位：教材開発や授業準備の時間確保（54.9%）
- 3位：評価手法の確立（46.6%）
- 4位：授業進度の懸念など時間数の不足（39.2%）
- 5位：受験指導とのバランス（38.9%）

■ 授業改善に取り組んで見えてきた課題や改善点（「アクティブラーニング型授業」導入校のみ／複数回答）

